

# 31 分割後期・二次 国 語

## 国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、11ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にH B又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

## 1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 早朝の高原で澄んだ空気を吸う。
- (2) 生徒が静粛にして講演会の開始を待つ。
- (3) 全国大会出場を祝う横断幕が校舎に掲げられる。
- (4) 地道にボランティア活動を続ける兄を誇らしく思う。
- (5) 秋になると多くのツルが越冬のために日本に飛来する。

## 2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 書き初めて使った毛筆をアラう。
- (2) 地域で協力し、日頃からポウハンに努める。
- (3) 互いに助け合い、一人一人の仕事をケイゲンする。
- (4) 夕日に照らされて、アタリ一面がオレンジ色に染まっている。
- (5) 二人の選手が向かい合ってレイをし、剣道の試合が始まった。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

絵を描くことが好きな中学三年生の広末雨音は、東京から、母の兄で写真家の乾道夫が住む長野県の立科町にきている。ある日、雨音は、道夫の影響で写真を撮るようになった隣の別荘にきている高校生の国枝正樹と道夫と三人で、道夫の飼い犬のワルテルを連れて、蓼科山の麓の森にやってきた。

立科へ来て、食生活ががらりと変わった。道夫の食卓には魚料理はもちろん、鹿や猪といったジビエ料理もよく出てくる。母なら顔をしかめて箸をつけようとしなかっただろう。だが、そうした料理を雨音は美味しく食べた。

母は休日に渋谷や銀座へショッピングに出かけるのが好きだった。雨音もお洒落に興味がないわけではないが、デパートやブティックを何軒も訪ねるのは苦手だったし、どちらかといえば、映画を観たり、美術館に足を運ぶ方が好きだった。

だから、母と出かけるのは退屈で、時に苦痛ですらあった。デパートの催事場で絵画展などがあると、母と別れてひとりで絵を見ていた。

母と一緒に美術館をまわれたらいいのに。昔はよくそう思い、恨めしい気持ちに駆られた。だが、いつの頃からか、なにも感じなくなってしまった。ワルテルの唸り声に、雨音は我に返った。ワルテルはとぼとぼと歩いてくる雨音に苛立っている。

「ごめん。そんなに怒らなくてもいいじゃん。」

雨音は歩く速度を上げた。近づくと、ワルテルが歩き出す。その後を追った。

十メートルほど先に開けた場所があって、大きな岩が横たわっていた。

ワルテルはそこを目指しているようだった。

霧は森の隅々に行き渡っていた。<sup>(1)</sup>時に息苦しくなるほどの森の濃密な空気が、霧と共に肺の中に入り込んでくる。森の空気は冷たく湿って、けれどどこか懐かしい。

ワルテルが岩の前で足を止めた。雨音はワルテルの傍らに立ち、岩にそっと触れた。岩の表面は滑らかだった。うっすらと濡れ、氷のように冷たい。

ワルテルは雨音から離れ、匂いを嗅ぎながら岩に沿って歩き出した。匂いに夢中になっている。この森に住む野生動物の匂いがするのかもしれない。

雨音は岩肌を耳を押しつけた。岩の鼓動が聞こえるような気がしたのだ。なにも聞こえなかった。だが、耳たぶや頬に触れる岩の硬さが心地よかった。

「雨音、その岩によし登れるか？」

道夫の声が耳に届いた。振り返る。いつの間にか、道夫と正樹との距離が詰まっている。写真を撮りながらこちらに歩いてきていたのだ。

「登れると思いますけど。」

岩の高さは一メートルほどだ。ところどころにある出っ張りに手脚を引っかければなんとか登れそうだった。

「登ってくれ。」

雨音はよし登った。岩の上に立つと森の中の世界が違って見えた。岩の上は霧が薄く、下は濃い。なんだか、雲の上に立っているような気分だ。

ワルテルが吠えた。雨音を真似て岩をよし登ろうと試みるが、上手く

いかず、苛立って吠えている。雨音は岩の上でしゃがみ、ワルテルを見おろした。

「ほら、わたしはワルテルの子分なんですよ？ 子分にできることが、どうしてワルテルにできないの？ 早く登っておいでよ。」

ワルテルの爪が岩肌を擦る音と、道夫たちがカメラのシャッターを切る音が交互に聞こえる。

ワルテルはこれ以上はないという真剣な顔つきだった。

「けっこう可愛いところあるじゃん、ワルテル。」

雨音は微笑んだ。

森の外から聞こえてくる雨の音が弱くなっていた。霧は濃淡を変えながら森を埋め尽くそうとしている。

「おまえの母さんはこの森が好きだった。」

道夫が言った。カメラは構えたままだ。

「あの人が？」

「雨が降っても全然濡れないって、子供みたいにはしゃいでた。おまえに雨音という名前をつけたのは、この森のことが頭にあったからだ。この森の中で、雨に打たれずに聞く雨の音が好きだったんだ。」

<sup>(2)</sup>雨音はうなずいた。すぐ近くで雨の音が聞こえるのに濡れることはない。それは不思議で甘美な感覚だった。

ワルテルが吠え続けている。

「そんなにここに来たいの？」

声をかけるとワルテルは吠えるのをやめた。小首を傾げて雨音を見つめる。雨音の言葉を理解しようとして必死になっているみたいだった。

ふいに、頭上に温かいものを感じた。森の上の方を仰ぎ見た。微かな梢の隙間から、一条の光が射し込んできていた。

「光芒だ……。」

雨音は立ち上がった。微かな雨の音はまだ続いている。わずかな雲の隙間から太陽が顔を覗かせているのだろう。その光が、鬱蒼とした森の隙間を貫いてきた。

霧の立ちこめる薄暗い森に射し込む一筋の光は幻想的で荘厳だった。

雨音は光に向けて腕を伸ばし、掌で光を受け止めた。冷えていた手にほんのりとした温かみが宿った。

次の瞬間、光が消えた。雨雲がまた太陽を覆ったのだ。

「消えちゃった。」

雨音は呟いた。ついで、森の中にマシンガンのような音が響いているのに気づいた。道夫と正樹のカメラが立てる音だった。ふたりとも、カメラを連写モードにしてシャッターボタンを押し続けている。

「ほんとに親子みたい。」

雨音は苦笑し、岩から飛び降りた。すぐにワルテルが体を押しつけてくる。

「ワルテルも登れたらよかったのにな。」

雨音はワルテルの頭を撫でた。道夫と正樹はまだシャッターを切り続けていた。

森の中で弁当を食べ終わると家に戻った。湯を張った風呂に浸かり、冷えきった体を温める。バスルームから出ると、道夫とワルテルの姿が

なかった。仕事部屋からパソコンを操作する音が聞こえてくる。

雨音は自室に向かい、スケッチブックを開いた。頭の中にイメージがはつきりと残っているうちに絵にしておきたかった。

霧煙る森の中で、夢中になってカメラを構えている父と息子。

道夫と正樹は本当の親子ではないけれど、そんなことはどうでもいい。大切なのはイメージだ。

紙に鉛筆を走らせていく。下描きを描いたことはほとんどない。紙に直接イメージを刻みこんでいくのだ。針葉樹の暗い森と霧を鉛筆の線の濃淡で描き分けていく。

いつしか没頭して時間が経つのも忘れていた。我に返ったのは、ドアをノックする音が響いたからだ。

「はい?」

「昼飯、どうする?」

道夫の声に、反射的にスマホに目をやった。すでに午後一時を回っていた。三時間近く、絵を描き続けていたことになる。

森の中で朝食にはけっこうな分量の弁当を食べたのだが、空腹を覚えていた。

ワルテルと一緒に森の中を動き回ったからだろう。

「食べます。」

「ハムカツカレーだけど、いいか。」

「はい。」

「じゃあ、十分後におりてきてくれ。」

(馳星周「雨降る森の犬」による)

〔問1〕<sup>(1)</sup> 時に息苦しくなるほどの森の濃密な空気が、霧と共に肺の中に入り込んでくる。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 雨音がワルテルを追いかけた後に呼吸を整えている様子を、様々な角度から捉え、順序立てて描くことで説明的に表現している。

イ 雨音が森の空気を吸い込んだときに感じていることを、雨音の感覚を通して捉え、丁寧な描くことで臨場感豊かに表現している。

ウ 森の奥にまで広がっていく冷たい霧の動きを、霧の濃度に着目して素早く捉え、生き生きと描くことで躍動的に表現している。

エ 森の奥で急に深く息を吸い込んで苦しんでいる雨音の姿を、細部まで捉え、ありのままに描くことで情感豊かに表現している。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 雨音はうなずいた。とあるが、雨音が「うなずいた」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 母が自分の名前を雨音と決めた理由を突然聞かされて何と返事をすればよいのが分からず、うなずくことしかできなかったから。

イ 森の中で聞く雨の音を母が好きだったことを知り、うるさくて本当は好きではない雨の音が不思議と気にならなくなったから。

ウ 母が森の中で喜んでいる姿は想像できなかったが、自分に向き合っ

て丁寧で説明してくれる道夫の言葉を信じようと思ったから。  
エ 森の中で母と同じように雨に濡れずに雨の音を聞く心地よさを実感したことで、自分を雨音と名付けた母の思いに共感できたから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 雨音は光に向けて腕を伸ばし、てのひら掌で光を受け止めた。とあるが、この表現から読み取れる雨音の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 現実とは思えないほどの美しさで自分の心を奪った光にしっかりと触れ、光の存在を確かかなものとして感じ取るうとしている様子。

イ 周りがよく見えなくなるほど光がまぶしいので、掌で光に触れて遮ることで神秘的な森の情景を隅々まで見ようとしている様子。

ウ 突然目の前に現れた光が今にも消えそうなほどはかなく感じられたので、そっと触れて光の明るさを確かめようとしている様子。

エ 頭の上に温かみを感じさせるほどの強い光に手を伸ばして触れ、森の中でいつの間にか冷えてしまった体を温めようとしている様子。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 雨音は苦笑し、岩から飛び降りた。とあるが、このときの雨音の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 岩の上に一人で取り残されていることに不満を感じつつも、岩の下で自分を待つてくれているワルテルをいとおしく思う気持ち。

イ ずっと写真を撮り続けている道夫と正樹の熱心さに感心しつつも、二人が撮影のことしか考えていないことを苦々しく思う気持ち。

ウ まるで親子のように見える道夫と正樹の姿を好ましく思いつつも、撮影に夢中な二人にこれ以上は付き合いきれないと思う気持ち。

エ 道夫と正樹と一緒に写真を撮る仲のよさをうらやましく思いつつも、自分は二人のように一つのことには打ち込めないと思う気持ち。

〔問5〕紙に直接イメージを刻みこんでいくのだ。とあるが、このとき<sup>(5)</sup>

の雨音の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 絵を見る人の心に深い印象を与えるために、様々な表現の技法を使って、美しい森の情景を幻想的に表現したいと思う気持ち。

イ 森で体験した様々な出来事を忘れてしまう前に、大まかな構図を先に決めておき、後でゆっくりと絵を描きたいと思う気持ち。

ウ 自分が森で見た情景を正確に表現するために、昼食の時間さえも惜しんで、何度描き直してでも絵を仕上げたいと思う気持ち。

エ 心に鮮明に浮かぶ情景を、表現の仕方に悩んだり迷ったりすることなく、そのまま一気に紙の上に描き出したいと思う気持ち。

#### 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

ヒトの社会性にとって、「共感」が大きな働きをなしていることは明らかだ。ヒトは他者に共感するので、他者をないがしろにすることもできず、自己利益だけを追求することもできない。では、「共感」とは何だろうか。それは、どこから進化したのだろうか。(第一段)

俗に「共感」と呼ばれている感情には、いくつかの段階と種類がある。もつとも基本的で低次のものは、他者の情動状態が観察者に伝わる「情動伝染」である。たとえば、他者が腕に注射針を刺されているのを見ると、自らも痛みを感じてしまう、という反射的な反応状態である。(第二段) 次に「感情移入」という現象がある。これは、他者の感情状態を我が事のように感じてしまうことを指す。勇壮な音楽を聴くと自分も鼓舞されたり、サスペンス小説を読んで、主人公の不安を我が事のように感じたりするのが、この例である。(第三段)

そして最後に、「認知的共感」がある。これは、他者と自己を明確に区別した上で、他者の状態を理解し、その感情状態に共鳴することを指す。自分とはかけ離れた地域で起きている紛争の犠牲者の気持ちを、その状況を想定して理解するような場合である。(第四段)

これらはすべて、明確に分けられるものでもないが、近年は、これらを引き起こす脳活動の基盤についても明らかにされつつある。情動伝染と感情移入は、いろいろな動物で観察されているものの、認知的共感とは、ヒトに固有のものであるようだ。(第五段)

霊長類学者の山本真也<sup>(やまもとしんや)</sup>らは、飼育のチンパンジー二頭に対し、各自の状況では使えない道具をそれぞれに与え、どのような行動が見られるかを観察した。すなわち、あるチンパンジーには、ジュースを飲むためのス

トローはあるが、ジュースの容器自体は手の届かないところにある。一方その隣のチンパンジーには、ジュースの容器はどこにもないが、長いステッキが手元にある、という状況である。ステッキを持っているチンパンジーにとっては、ステッキは何の役にも立たない。しかし、隣のチンパンジーにそれを渡してあげれば、隣はそれでジュースの容器を引き寄せてジュースを飲むことができる。さて、彼らはどうするだろう。(第六段)

ほとんどの場合、ステッキを持っているチンパンジーは、ジュースの容器を取ろうと苦労して手を伸ばしている隣人に対してステッキをあげようとはしなかった。しかし、一旦、隣のチンパンジーが「ステッキをよこせ」という明確なサインを出したなら、彼らは躊躇せず(ちゆうちゆう)にそれを差し出したのである。山本はこの行動を「チンパンジーはおせっかいをしない」と表現している。(第七段)

(1) 「おせっかい」をするには、シグナルがなくても他者の要求をあらかじめ理解するのみならず、他者がそれを理解していることをも理解しなければならぬ。「あなた、ステッキ欲しいんですよ。それは言わなくても分かるわよ。私、持つてるけど、いらぬからあげるわね」ということなのだ。そしてステッキを差し出してくれるその行為を、相手が、「ありがたい、私の気持ちを察してくれて」と感じるならば、それは「おせっかい」ではない。「別にそこまでしてくれなくてもいいんだけど」と思うときがおせっかいなのだ。そこには、両者の間に、「私があなたの気持ちを理解している」ということを、あなたは理解している、ということ(私を解している)、「という理解の入れ子構造が存在する。チンパンジーには、それが無いらしい。「私はあなたの気持ちが理解できる」、それだけなの

だろう。だから、シグナルがなければステッキをあげないし、シグナルを出さない限り、ステッキをくれなくても怒ることもない。(第八段)

(2) 言語とは、このような入れ子構造の心の理解の上に成り立っているコミュニケーションである。言語は決して、「あっちへ行け」、「これ欲しい」といった、他者を動かすための単なる信号ではない。他者に「心」があることを承知した上で、自分と相手の「心」どうしを共有しようとするコミュニケーションである。(第九段)

このことは、ヒトの言語コミュニケーションの多くが、世界についての描写であり、その描写を共有しようとするものであることからもうかがえる。「お空青いね」、「ピンクのお花が咲いてる」、「あ、〇〇ちゃんがいるよ」、「今日は寒い」などというコミュニケーションは、発信者による世界の描写、発信者の「心」が世界をどう捉えているかの描写である。それに対して、「そうだね」という応答が普通は返されるのだが、それは、その心象が共有されていることの承認だろう。それが、ヒトにとっては実に心地よいことなのである。(第十段)

言葉を覚え始めたばかりの乳幼児は、そんな論理など何も理解していないにもかかわらず、「あ、ワンワン」と言つて「そうね、ワンワン可愛いわね」と言われると喜ぶのである。チンパンジーはこのようなことはしない。言葉を教えられたチンパンジーにおいて、彼らが自発的に発する言葉の九〇パーセント以上は、物の要求であり、世界の描写ではないのである。つまり、彼らは言葉を、世界の描写による心の共有に使っているのではなく、自分の要求をかなえるための信号として使っているのである。(第十一段)

このような「心」の共有があるからこそ、ヒトは言語を持ち、文化を作り、世代を超えて改良しながら伝えていくことができるのである。(第十二段)

霊長類のほとんどの種は、社会集団を作って暮らしている。ヒトが社会集団を作るとは、この霊長類の進化の延長上にある。しかし、人類進化のいつかの時点で、ヒトの祖先は、単に群れを作っているだけではなく、個体どうしが「心」を共有することを始めた。ヒトの「心」は、他者の情動を我が事のように受け取るばかりでなく、他者の状況を理解し、他者の感情に共感することができる。(第十三段)

ヒトは因果関係の推論ができ、物事が「なぜ」そうなっているのかを説明する。それによって、道具製作など、物理的な世界に関する問題解決の方法を發明し、改良していくことができる。それと同時に、認知的共感があるおかげで、他者の置かれている状況を理解し、その状況が起きている因果関係も推論し、それを改良する方法も探ることができる。

つまり、社会的な問題解決をはかることもできるのである。(第十四段)

(3) ヒトが自分の「心」にある心象を言語で表現し、それを他者と共有することは、世界に対する認識を互いに了解することだ。認識が異なることが分かると、了解が得られるまで話し合うことができる。それは、物理的な問題に対しても、社会的な問題に対しても行える。それによって技術は進歩し、社会は改良されていく。このような能力に裏打ちされたヒトの社会性が、ヒトという動物を繁栄させているもっとも重要な要因だと言えるだろう。(第十五段)

(長谷川眞理子「世界は美しくして不思議に満ちている」による)

〔問1〕「おせっかい」をするには、シグナルがなくても他者の要求を

あらかじめ理解するのみならず、他者がそれを理解していることも理解しなければならない。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「おせっかい」の具体例を示すことで、チンパンジーが他者の感情状態を理解して行動に移すことを実証し、ヒトだけでなくチンパン

ジーにも認知的共感が見られることを説明しようと考えたから。

イ 「おせっかい」の意義を示すことで、チンパンジーが他者と道具を共有できない理由を解き明かし、他者に共感しながら道具を使うことができるのはヒトだけであることを証明しようと考えたから。

ウ 「おせっかい」の構造を示すことで、チンパンジーが他者からのサインによってその感情を理解するということを確認し、認知的共感がヒトに固有のものであることを明らかにしようと考えたから。

エ 「おせっかい」の影響を示すことで、チンパンジーのサインがヒトの言語と異なる働きをもつことを伝え、ヒトが言語を獲得していった脳活動の進化の過程について持論を展開しようと考えたから。

〔問2〕 言語とは、このような入れ子構造の心の理解の上に成り立って

いるコミュニケーションである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 言語とは、言葉を用いることなく互いの思考や感情を理解することで、集団による社会生活を可能にするサインであるということ。

イ 言語とは、自他の気持ちや状態を互いに理解し合った上で、自分の思いを伝えたり相手に応答したりするための手段であるということ。

ウ 言語とは、相手の要求を正確に理解した上で、自分の取るべき行動について確かめたり伝えたりするための手だてであるということ。

エ 言語とは、要求を伝えて相手を動かすための信号ではなく、状況に応じた行動を相手に推論させるための技能であるということ。

〔問3〕 この文章の構成における第十二段の役割を説明したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきたコミュニケーションの成立の過程について、根拠となる事例を示すことで、論の妥当性を主張している。

イ それまでに述べてきた「心」の共有に関する主張について、反対の立場から異なる見解を示すことで、話題の転換を図っている。

ウ それまでに述べてきたコミュニケーションの問題点について整理し、解決に向けた方向性を示すことで、別の問題を提起している。

エ それまでに述べてきた「心」の共有の働きについて明らかにするとともに、新たな視点を示すことで、文章全体の結論へと導いている。

〔問4〕 ヒトが自分の「心」にある心象を言語で表現し、それを他者と

共有することは、世界に対する認識を互いに了解することだ。とあるが、「世界に対する認識を互いに了解する」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア ヒト同士が互いに相手の置かれている状況を想定し、問題となる事象やその原因、解決方法を共に考えたり理解したりすること。

イ 相手に対して共感的な応答を返し、自己が承認されているという心地よさを与えることによって、社会的な問題の解決を図ること。

ウ ヒト個人の様々な要求を社会的な問題として集団で共有し、高度な技術や発達した道具を活用して解決し、社会を繁栄させること。

エ 他者の情動に自分自身を重ね合わせ、感情と行動の因果関係を推論することによって、他の動物にない認知的共感を得ること。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、筆者の考えを参考にして、「心を共有するということ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

次のAは「百人一首」に関する座談会の記録であり、Bはその中で述べられている凡河内躬恒おほしこうちのみつねの和歌について書かれた文章である。また、Aのあとにある□内の文章は、Aに引用されている和歌とその現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。  
 (\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

A 馬場 凡河内躬恒はお嫌いですか？

渡部わたなべ いやいや私は好きですよ。

馬場 同時代では紀貫之きつらゆきが抜群にうまいです。でも一方で、当時から、もしかしたら躬恒のほうが本物なんじゃないかと思っただ人はかなりいたはずですよ。貫之の歌は理知的で、言葉の積み上げ方や逆転の仕方など、まさに言葉の魔術師。それに対して躬恒の歌はモヤモヤしているぶん、人間の情がある。

上野 躬恒は貫之のように史料が豊富ではないんですよ。研究者はどうしても一定の史料がないと不安になる。芸術の評価とは本来関係ないんですけど。

馬場 残された歌がもう立派な史料だと思いますよ。たとえば、夜の梅を歌った〈春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる〉なんて貫之には絶対にはできない技でしょう。心の中のモヤモヤとした気分をどう言葉で伝えるのかというときに編み出した方法で、こういうところに躬恒の歌のおもしろさがあると思います。<sup>(1)</sup>百人一首に選ばれた〈心あてに折らばや折らむ〉の歌は、正岡子規まさおかしが「歌よみに与ふる書」の中で虚構だとけなしました

たけれど、子規がこの歌を檜玉ひりたまに挙げたのは、これを否定すれば『古今集』の技巧的なところを全部切り捨てたことになるという戦略があつてのことじゃないかと思っています。

上野 『万葉集』の評価といえば、子規の万葉偏重主義がある。しかし、それだけが和歌ではないし、長い和歌史のなかではこの二つは最初期と近代という特殊な時期のものとも言えますしね。

馬場 ただ、『万葉集』にはその後の和歌が追求したものの全部があるんですよ。研究者でもないのにこんなことを言っただけの悪いだけだ、その後の和歌・短歌が工夫した技巧なんてみんな『万葉集』にあるじゃないですか。

上野 基本的な実験は『万葉集』で終わっていて、あとはそのよいところを伸ばしているだけ。

渡部 それには異議があります。

馬場 もちろん、『万葉集』だけあればいいという意味じゃないのよ。平安朝になるとさまざまな文化や芸術が入り込んできて、そういうなかで言葉は変化するものですから。

<sup>(2)</sup>橋本 さまざまな文化や芸術が入り込んできた、ということですが、中国の影響について伺ってもよろしいでしょうか。たとえば美術の場合は中国の影響を強く受けながら発展していくのですが、和歌で個人の心情を歌うということに関して中国の影響があるのでしょうか？

上野 そう単純に一直線で結べるものじゃないです。

馬場 私は心情について、中国の影響があるとするのは反対です。「景」については別ですよ。みんな『和漢朗詠集』<sup>\*わかんろうえいしゅう</sup>を読んでいきますから、

それを和歌の世界に持ち込んだものも多い。でも、たとえば恋の心情でいうと、恋は万葉仮名では「孤悲」とも書く。つまり孤独な悲しみなんです。こういうのは誰の真似をするという類のものではなく、もつと本能的な、本質的な詩人の感情の表出ですよ。詩歌というのは形だけを真似ても痩せていくばかり。日本には助詞と助動詞の微妙な世界がありますね。そこに日本の詩歌の面白みがある。

(3) 一字の違いで意味がガラリと変わるでしょう。

**上野** 万葉時代は、律令制度という中国の国家モデルに倣っているわけです。文化も中国文化偏重の時代。しかし、そのなかで和歌だけは中国文化に対する一種の物言いであったとも言えますね。

(上野誠、渡部泰明、馬場あき子、橋本麻里)

「新・三十六歌仙はかくして決まった」による)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる

春の夜の闇は理屈に合わずわけが分らないよ。暗闇に咲く梅の花はたしかにその色は全く見えないが、香りは隠しようもないではないか。だからそのありかはすぐ分るよ。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

どうしても折ろうというのなら、当て推量で折る以外にないだろうよ。初霜が一面に白く置いて、折ろうとする私をうろろさせる白菊だよ。

(新編日本古典文学全集II「古今和歌集」による)

**B** 心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花

凡河内躬恒

この歌は正岡子規が「歌よみに与ふる書」の中で、『古今和歌集』の歌はこれほどくだらないという好例の一つとしたことでも有名な一首。「今朝は霜が降って白菊が見えんなどと真面目らしく人を欺く」と非難している。写実の手法の一点から王朝の知識人たちの知的遊戯性を批判したものだ。

しかし一方、和歌史の中では多くの歌書に名歌として引用されつづけてきた。「折らばや折らむ」は「折るなら折ろうか」という意味になる。

(5) きわめて婉曲に微妙な心の動きを伝えていて面白い。霜があまりにまっ白に植込みの草花を覆っているの、どれが白菊やら見分けがつかないということなど、たしかに意味だけを追えばありえないことだ。

この時代に菊はまだ大陸渡来の外来種として、宮中や貴族の庭に植えられる貴重な花であった。色も白菊以外になかった。その菊を賞でる賞で方がここでは勝劣を決める。はつとするような初霜の朝の、冷たくさやかな空気と白い視野。その新鮮な驚きと、冷え冷えとした白菊のやさしいかがやきを、混交させ戸惑うところがこの歌の趣向である。「折らばや折らむ」という高揚感と、「おきまどはせる」という遊びごころの対置が巧みである。

(馬場あき子「馬場あき子の『百人一首』」による)

〔注〕「古今集」——古今和歌集。

「和漢朗詠集」——和歌と漢詩句の優れたものを収めた平安時

代中期の詩歌集。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 百人一首に選ばれた〈心あてに折らばや折らむ〉の歌は、正岡まさおか

子規しきが「歌よみに与ふる書」の中で虚構だとけなしましたけれど、

とあるが、ここでいう「虚構」の内容についてBの文章ではどの

ように述べているか。次のうちから最も適切なものを選び。

A 霜に覆われて白菊の花が全く見えなくなってしまうた庭の様子を、  
趣向を凝らして巧みに表現し、遊び心のある和歌にしている。

I 当時の日本にはまだなかった菊をまるで目の前に咲いているかのよ  
うに、写実的な手法を用いて、知的遊戯性のある和歌にしている。

ウ 真っ白な霜に紛れて白菊の花を見付けられないなどと、現実にはあ  
りえない事柄を、本当にあったかのように和歌にしている。

エ 寒い朝に霜が降りて黄色い菊が真っ白になっているなどと、いつも  
見ている様子とは異なる情景を、名歌を引用して和歌にしている。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 橋本はしもとさんの発言のこの座談会における役割を説明したものとし  
て最も適切なのは、次のうちではどれか。

A 馬場さんの発言から新たな論点を見だし、関連する事例とともに  
具体的な質問を提示することで、話題の転換を図っている。

I 馬場さんの発言を基にこれまでの話の内容を整理し、反対の立場か  
らの自分の解釈を紹介することで、話題を焦点化している。

ウ 馬場さんの発言への強い同意を示し、馬場さんの発言の内容を別の  
表現で分かりやすく言い換えることで、話題をまとめている。

エ 馬場さんの発言に対する疑問を投げ掛け、馬場さん以外の二人に自  
分の考えを伝えて賛同を求めることで、話題を整理している。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 一字の違いで意味がガラリと変わるでしょう。とあるが、「一  
字の違いで」の「で」と同じ意味・用法のものを、次の各文の

——を付けた「で」のうちから選べ。

A 高原に吹く風は、さわやかで心地よい。

I 木陰のベンチで、親しい友人と語り合う。

ウ 気に入った詩を、何度も読んで味わう。

エ 久しぶりの雨で、乾いた大地が潤う。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 理屈に合わずわけが分らないよ。とあるが、Aに引用されてい  
る和歌において「理屈に合わずわけが分らないよ。」に相当する  
部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選び。

A 春の夜の闇

I あやなし

ウ 色こそ見えぬ

エ かくるる

〔問5〕<sup>(5)</sup> きわめて婉曲えんきよくに微妙な心の動きを伝えていて面白い。とある  
が、ここでいう「微妙な心の動き」を説明したものとして、最も  
適切なものは、次のうちではどれか。

A 冷え冷えとした朝の空気に戸惑いながらも、これから貴重な白菊を  
折るのだという決意を新たにしている。

I 霜が降りた白菊の情景を初めて見て驚きながらも、先に他の人に折  
られてしまわないかと焦燥に駆られている。

ウ 白菊が霜で見分けられずに困惑しつつも、見当を付けて折ったら折  
れるだろうか和白菊への思いが高まっている。

エ 霜の中で孤独に咲く白菊に同情しつつも、試みに折ってみた白菊の  
鮮やかな美しさへの感動が大きくなっている。